

現実ではありません。一つの理解であります。そういうことで今日はここまでのご紹介であります。

司会 安田先生、どうもありがとうございました。ただ今、特に医学の領域における総合という概念を中心にしながら、常磐大学の現行のカリキュラムの中で特に総合ということがどのように行われているかということをつえながら、大学院教育も含めて問題点を整理していただきました。先程お願いしましたように、ご意見ではなくてこういう点では常磐大学ではどうなのかということを確認するような意味でのご質問があればお願いします。

森井 文教大学〔人間科学部長〕の森井利夫です。きわめて簡単な質問をします。早稲田大学の場合にも同じなんですが、大学院は人間科学研究科でいらっしゃると思うんです。人間科学研究科〇〇専攻というような専攻名を教えてくださいませんか。

安田 今ちょっと細かく全部覚えていないんですけども、先程の専門科目の中のいくつかがそのまま専攻名になっています。

森井 大学院の研究科の中の専攻がそんなにたくさんおありになるんですか。

安田 いえ。四つぐらいです。

濱口 早稲田は二つに分かれていて、一つは生命科学専攻、もう一つは健康科学専攻の二つに分かれています。

司会 その他ございませんか。それでは安田先生、どうもありがとうございました。それでは最後になりますけれども、札幌学院大学の中野人文学部長をお願いします。

中野徹三札幌学院大学人文学部長「人間学概論Aの講義の経験から」

最初、報告することとしては簡単に、学部開設後間もなく人間学概論Aという、これは人間科学科の必修科目で1年生が受けるわけでありましてけれども、その経験を話そうかという程度のことと考えておりましたけれども、他の諸先生からそれぞれの学科、学部の成り立ち、特徴などのご報告があるということで、急遽それをも少し補いまして、その他の資料と一緒にご報告させていただくことにいたします。参考資料のレジュメ〔120頁以下の資料(6)を参照〕が四つ程ございますけれども、随時参照していただきながら、報告項目に沿って簡単にお話し



申し上げます。

まず最初に本学人間科学科設立までの歩みからということではありますが、ここに設立趣意書自身はこのレジュメの後ろの方についてございます。1976年が申請した年であったかと思えます。趣意書の原案は私が書いたものでありますもので、その趣意書がここにのせてあります。これは大阪大学、立正女子大についで3番目の人間科学科ということになったわけで、20年前

に発足したわけでありまして、そこでの問題意識あるいは設立にあたりましての歴史的な諸前提を少し大げさに書いております。一つは人間生活が直面しております総体的な環境破壊、あるいはこの当時にはまだ冷戦が続いており、核戦争の危険ということが当然大きな問題となっておりました。さらには環境破壊は70年代以降です。地球的な規模で浮上してまいりました。あらゆる意味での危機が叫ばれ、その危機自身が総対的な連山をなしておりました。その点の認識が我々の出発点になったのであります。おそらくどの学部学科についても同じことが言えると思います。

またそういったことが背景にありまして、私どもの直接的な問題意識といたしましては、これまでの社会科学、あるいは人文基礎科学、その他の学部学科というものは、それぞれお互いに他の学科やその学問をほとんど知ることなく卒業していく。私自身、北大の史学科の西洋史の専攻でありますけれども、同じ文学部にある思想史は必要です。私は主に専門としては社会思想の研究でありましたけれども、史学科の学生は、社会学科にあるような学問、あるいは心理学の分野、思想の研究は必要なんですけれども、ほとんど学ぶことができないか、あるいはその必要もないという中で卒業していく。それではおかしいのではないかと。まして、人間を研究する上で歴史などをやっております、思想史などをやるようになってそれを痛感しておりました。大学院の頃、他の社会学あるいは心理学、文学、哲学などの専攻の人たちと文化と科学の研究会などをつくりまして、包括的に文化人類学あるいは法学など、いろんな分野の話をいろいろお互いに紹介しあい、大変ためになったというようなことがございまして、そういう問題意識を当初からもっております。多かれ少なかれ、これは社会・人文諸科学を、これまでの既存の学問を当時学ばれた先生方に共通した体験ではないかと思えます。その点が一つあります。

またさらに具体的なこういう形態をとったという要因の一つにありましたのは、いわゆる一般教育と専門教育の間の問題です。本学におきましては、特に商科大学が29年前にできまして

以来、そのときには札幌短期大学と札幌商科大学、二つの大学が並行して走っていったわけがありますけれども、全体としてかなり民主的な運営体制を構築していったという点から申しますと、もちろん商大と短大、一般と専門、その間に言われるような対立やあるいは格差というのはないはずであったのです。しかし、一般と専門、短大と商大という間にどうしても一種の格差意識が生じるし、また全国的にもそういう制度として一般教育、若い専門分野が下積みのような意識で捉えられて、一般教育に該当するのでも短大なのだという事になってしまいます。あるいは商大と短大が、並行して走っておりますと、商大から短大には行きたくないという、人事移動上のそういう問題なども生じておりました。

それと従来の人文・社会諸科学の先程のような一種の断片性に対する批判がありました。そういうものと、現代世界の危機、その総合性という点をあわせて、これをどうしたらいいかということの中で、商大と短大を統合して現在の場所にもってくることになりました。短大をいわば発展的に解消して、こちらの商大で、その先生、スタッフを生かして新しい学部学科をつくろうということを構想したとき、これらの問題は一挙に同時に解決するという事で考えましたのが、人間科学科と短大の英文科を基本にいたしました英語英米文学科という、人文学部の構想になったわけであります。

そこでは、当時は商学部の1部と人文学部だけでありましたけれども人文学部とりわけ人間科学科は大学全体の一般教育を主に担当する学部でありながら、同時に独自にそれは専門学部である。そういうものとして構想しようということになりました。そのことの背景には、札幌商科大学と札幌短期大学に、規模から申しますと比較的多くの一般教育のスタッフがいたということがあったわけです。それを生かして総合的な人間の研究と解明という意味での人間科学科の構想というものが具体化したわけであります。スタッフの構成の特質といたしましては比較的、思想や文化、哲学などの領域や教育の分野の先生たちが多い。こういう所から今までのいわゆる人間関係学科、これは社会学、心理学、教育学この3専攻にあったものでありますけれども、それはなかなか構成できない。社会学と心理学の専門の先生は本学でほとんどいらっしゃらない。こういう点から、3専攻的な3つのコース、最初はコースというのはやっていないのですけれども、その考えが変わってきたわけであります。

今のレジュメの終わりから2枚目の所をご覧くださいますと、当初のカリキュラムがございます。これは申請したときのもので4年間これでやったと思います。人間科学科の専門教育科目はここではこういうふうになっております。専門の基礎科目がございます。人間科学基礎論は、最初私どもには人間科学の専門家がいなかったということで、大阪大学の徳永さんが先輩でありまして、頼んで集中講義をやってもらうというようなことから始まったわけであります。まだ人間学概論A、Bがなかったときです。そして3専攻にあたるようなものの一つは「社会生活と人間」です。社会学と福祉それから歴史の先生たちを生かした、「社会生活と人間」の当初は授業科目群で出発しました。

もう一つは心理学と教育学をあわせたものとして「人間の形成と発達」という名前をつけたのであります。もう一つは「思想・文化と人間」ということでこの三つがありました。その他に、北海道の人文学部であるということで、北海道の研究というのを密度を高めて置いたわけでありまして、これがその入口におかれております北海道文化論となりまして、毎年その先生による講義は出版されております。こういうような従来の他の人間科学科あるいは人間関係学科と違った構成になったのは、当初のスタッフ構成の特質によって規定されているということになろうと思います。その点が本学部の特徴であろうと思います。

設立趣意書の中にもありますように、先程申し上げたように、それは一つの専門学部として人間の総合的な研究と教育、人間と人間生活をその多様性と発展のうちに総合的・全面的に把握できる、新しい意味でのゼネラルスペシャリストの養成ということを掲げたわけでありまして、そういう学部でありながら、同時に全学の一般教育を新たな視角から認知させる任務を担う学科でもあるという、複合的な規定をしたわけでありまして、これまで20年間まいりまして、その間にいろいろと手直しをしたり、試行錯誤を重ねていったわけでありまして、根本的な構造は大きく変わっていないと思います。

3番目のページに現行のカリキュラムが表示されておりますけれども、コースと銘打ちまして、「社会生活と人間」コース、「人間の形成と発達」コース、「思想・文化と人間」コースということになっております。

実は、当初申請しましたときには、人間研究学科という名称で申請をしたんですけれども、その際には四つ目の科目の中に「自然と人間」というものをおいたわけなんです。これは自然科学のスタッフをそこに配置したわけで、当初自然科学を専攻し教えている先生たちもこの人間科学科に所属していたのでありますが、後に商学部の方に移籍になりまして、自然科学の人たちは他の学部へ行ったわけでありまして、この3コースできたわけでありまして。

学生の進学の実情は、表1〔121頁を参照〕にありますように、定員は100名でありましたが、92年からいわゆる臨定を50名増やしまして150名、志願者数は今年は1500名ぐらいで、この2～3年若干減っておりますけれども、あまり大きく減ってはおりません。

他の学部と比較いたしますと、定員200名の他の学部で人間科学科よりも多くの志願者を集めておりますのは、96年につきましては、経済学部だけです。ほかに経済と商と社会情報と法学とがありますけれども、いずれも定員200名で、その中で定員100名、臨定で150名の人間科学科は経済学部を除いては他の学部よりも志願者が多く、女子学生の比率も全学の女子学生のほぼ6割がこの人文学部です。人間科学科は女子学生が現在では半数をこえています。この3年ぐらいで男女の比率が逆転して、これは全国的な現象でもあります。

それから、社会人入学が相対的に多いことは、この合格者数、入学者数の中に集約されている通りでありまして、看護婦さんを一旦辞めてとか、主婦というようなケースもあります。それは人文学部人間科学科に対する社会的需要の特徴であろうかと思うんです。

それから学生の進路は、それほど他の学部と大きくは変わっておりませんが、若干特徴があります。と申しますのは、一つは「思想・文化と人間」の所で考古学のことを勉強して学芸員になっているような人たちがいて、これがカラーに出ております。1年に4名程学芸員になったこともございます。

それから社会教育主事、社会福祉主事などの資格をとって福祉の分野に進んでいる人たちがいます。あるいは教職があります。今まで人文学部で教職に就いたのは、3年ぐらい前までで73名ということでありまして、40数名が人間科学科の卒業生ということで、このあたりが少し他の学部と違う特徴です。福祉分野、学芸員、つまり文化の方にも進出しているところであります。

しかし、いくつかの問題に直面しております。一つは、3つのコースはそれぞれ同じ学科の中においてあるわけでありまして、やはり今の様々な就職事情、女子学生がますます増えているという中で、しかも志願者は他の学部比べて相対的にあまり減らないということはそれだけの需要があることを示しています。同じような人文系の学部・学科は道内にこの20年間の間に後を追いかけてかなりできました。私どもの人文学部は本道最初でありましたが、そういう人文系の諸学部ができました。今年は札幌大学で文化学部ができていますが、文化学部という名前でできたのは日本で最初だと言われています。そういうような分野で競争も激化しています。

一つは、臨定を返す前に、これをどう有効に活用するかということで、今学部学科の将来構想の問題を私ども検討しております。一つ私の方の提案として考えておりますのは、人間科学科のほかに姉妹学科をつくり、たとえば臨床心理と教育、あるいは現在の人間科学科の思想・文化あるいは社会生活と人間と、こういった分野を中心とする二つの学科にして、定員をほぼ200名近くにできないかということを考えて提示しようかとしているところでございます。そういう将来構想の問題があります。

もう一つは、臨床心理学分野では臨床心理士の資格問題とかかわりまして、早期に大学院をつくらなければならないだろうと思います。しかし、もはや単独でうちの大学程度の規模の1学部150~200名で各学部ごとにつくるというのは、これは早稲田大学あるいは常磐大学のようにそれだけの規模をもってできないし、また現在の要請されているような状況ではまず困難であると思います。

それで、他の学部とも相談して、今年の3月私もその委員の1人として大学院の答申を出したのですが、大学院問題検討委員会で総合型の大学院をつくる案を考えています。二つぐらいの専攻として臨床心理学など含めて人間科学科を母体とする専攻課程、その社会人を大きくねらいつつ、また札幌市内にエクステンションセンターをおくというようなことを今提起しております。そのように検討中ではありますが、学部学科の改編または大学院の問題に直面していることをご報告しておきたいと思います。

学部学科についてはこれぐらいにいたしまして、私はこの中で当時の学園常務理事でもありまして、人間科学科の構想などをあわせて提示していくということをやった立場上、人間学概論をつくるというのは、自分が言い出したんだからお前がやれということになりまして、私が担当することになりました。今私担当しているわけではありますが、1年生の必修科目としてこれはなかなか大変であります。私の専門が、先程申しましたように、もともとは社会思想史で、とりわけ社会主義の研究なのでありますから、そこから自分を文字通り極端に逸脱させるというようなことをしなければならぬわけでした、そしてそれやってきたわけですから。

かなり後で講義要綱をまとめてつくったわけではありますが、その講義要綱はそこにありますように、人間学概論Aはこの学科全体の中でどういう位置を占めるか、何を課題にするかがここに書かれております。授業構成の事例とその具体化という所であります。人間科学科に進学している諸君に、2年以降どのコースに進むかにかかわらず21世紀に向けて生きる現代の人間の1人として、さらにこの時代に人間諸科学を学び探究しようとする青年として、最小限必要と思われる人間と人間についての総合的知見の基礎を必修科目にして提供しようとしたわけがあります。

そしてそれをどうするかと考えたわけではありますが、三つの部分に分けることに致しました。お手元に私の人間学概論Aの講義要綱があると思いますので、ご覧いただければお分かりのように、まず(1)人間観と人間科学の歩みですが、これはいわば人間科学の理論の歴史の問題です。(2)といたしまして、人間とは何かという人間学基礎論です。(3)に現代の人類が直面している諸問題です。この三つに分けた構成と目標を1年間で1年生がやるということで始めて現在に至っているわけです。

次のページになりますけれども、そうは言ってもこれはやらないといけないわけで、やりましてうまくいかないときは多少やけ酒でも飲んで解決してまいりました。やってきたわけですが、何年かやっていると、まず1年生が入ってきたとき、第3の現代の人類が直面している諸問題から入るのが1番良いということで、今順序としては第3から始めて、それから第1,第2という順序でやるということが定着いたしました。これもこのようにやってきまして、核戦争や核の冬の問題、このあたりは80年代の始めに展開したことでありまして、レーガンのSDI（戦略防衛構想）や、米ソによるINF配備をめぐる危機と関連しております。

それから、お手元にもう一つありますプリント類は、講義要綱の資料では当然足りないので毎年新しい資料を付加して学生に配布します。昨年は宮沢賢治の生誕100周年だったので、彼の詩集から、「生徒諸君に寄せる」などの詩や、「グスコブドリの伝記」から、火山島が爆発して大気中に炭酸ガスが増え、その温室効果で東北の冷害がなくなる童話などを紹介したりもしました。オウムの中には、スティーブン・ハッサンの著書『マインド・コントロール』の紹介などが大分理解に役立ったようですし、環境問題では、私が自然保護協会の理事をしていた頃に協会の機関誌にドイツの「森林死」について紹介した論文なども、配っています。毎回、

授業の終わりに短い感想や質問を書かせますが、人口爆発や環境破壊のほか、オームや介護福祉法など、その年に話題となった問題にも、強い関心を示し、積極的に受けとめてくれる学生が多いのに励まされます。

第1部の人間観の歴史ですが、意外に思想や文化、宗教などに関心ある学生が相対的に人間科学科は多くおまして、そういう学生たちには大変刺激になったとか勉強になったとか、積極的に受けとめてくれる場合が多かったわけでございます。また、在日朝鮮人の方や、アイヌ民族の方などをお招きして、こういった方の直接の体験などを1年に1～2回話していただくような講演も毎年取り組んでいます。

しかし、私が1番困ったのはほとんど世界史を勉強していないという学生が相当おまして、世界史の教養がないというあたりをどうするかという点が悩みのひとつです。

第2の人間学基礎論ですが、こういった問題につきましては、ほぼこれだけの時間で当面問題になるのは、人と人以外の生物との違いをひと通り明らかにするのがやっとで、しかも時間の制約と能力との限界からこれもままになりません。

特に脳と心の問題など、大変おもしろかったという反応もありますけれども、とにかく人間学基礎論と申しまして、あまりに一部であります。たとえば個性の問題、こういった問題が脱落してしまいます。さらに歴史的部分で人間が世界史をどういうふうに要約するかなど、大きな問題が残されているのが現状であります。

そういうわけで、いろんな時間の制約や限界にぶつかっていますが、その中で学生としては、積極的に受け止めてくれている部分としては、全体の見通しがついたとか、勉強になった、刺激になったというような受け止め方から、あまりにもかけ足で早すぎるとか、あまり自分の関心をもたない所もやらなくてはならないというようなことでの不満も出されたりします。

時間になりましたので、また後で若干時間がとれましたら、この第3の人間諸科学と「人間学」の間に触れたい、と思っております。

司会 どうもありがとうございました。札幌学院大学の人間科学科の場合は、今お話しがありましたように、既存の大学を改組するという過程で人間科学科ができたわけです。歴史的前提という言葉を使いましたが、ある意味では制約もあったわけで、そういう過程で20年間終わって新しいカリキュラムになったというご紹介と、その中の必修科目であります人間学概論をどういうふうに関心を持ってやっておられるかというお話がありました。時間の関係で切っていただきましたけれども、(提案)3のところで逆に人間学概論という教育を通して人間科学はどうあるべきかという問題を投げかけられております。あとの討論のところで、午前中にお出しいただいたものに逆につながっていくというふうになれば、まことに幸いです。

今お三方からご報告いただきましたが、先程突然ということをお願いを申し上げましたけれ

ども、今日御参加の大学の中では、人間科学部人間科学科あるいは人間科学部人間関係学科、それから人間科学と深く関わる総合科学というところからご参加いただいております。ただ今ご発表いただきました三つの大学以外に五つの大学の方から（複数でご参加いただいている大学もおありですが、お1人ずつに絞らせていただいて）簡単に5～10分くらいの間でそれぞれの学部・学科の現在の課題をご紹介いただきながら、ただ今のお三方のご報告に関連するような形で、いわば指定討論的な役割をお願いしたいと思います。是非ご協力をお願いしたいと思います。その中で議論していただく柱がはっきりしてくるのではないかと期待しております。順番でございますが、たまたまご報告の方々は、東京、茨城、いわゆる南から北へきましたので、五つの大学の方には南からお願いしたいと思います。最初に神戸女学院大学人間科学部の中里先生、いらっしゃいませんか。…それでは隣の大阪府立大学総合科学部からは午前中にもお話ししていただきましたけれども、その中でも教育の問題にふれられましたが、特に総合などという問題にもいろいろ提起がありましたので、さらにご提起いただきたいと思います。細見先生いかがでしょうか。…お二方とも席をはずしていらっしゃいますので、それでは東海地方から愛知みずほ大学人間科学部の飽田先生、お願いします。

飽田 愛知みずほ大学の飽田典子と申します。

うちの学校はまだ新設5年目で、既設の学校のように、長い歴史を重ねているわけではありません。

うちの学校は人間科学部人間科学科のみの単科大学で、その中に専攻が三つありまして、健康科学と行動科学と人間福祉から構成されています。受験生の希望は、最近のライセンス志向を反映して、人間福祉と行動科学に片寄る傾向があります。

健康科学の学生には、ここを卒業したらどういう資格がとれるのかというのがとても大きな関心です。それに対して、健康科学の方が公的資格がとれますというのが他学生のようにはっきりしていないために、行動科学と人間福祉の方に受験生が集中する傾向があらわれまして、この問題は学校全体に影響を及ぼしております。今年の3月に卒業生を初めて出した段階で、さらに魅力のあるカリキュラムをつくろうということで、学科目の検討に取り組みはじめております。社会的な要請というものに応えようとしても現実には受け入れの状態がまだ十分できておりませんし、たとえば今流行の臨床心理士の資格を学部を卒業して取ろうとするときに、自分の学校に大学院がないので、うちの学生たちが他大学の大学院を受験するというのが実情です。今年は努力のかいがあって80名ほどの行動科学の学生のうち3名が国立大学の大学院に合格して、頑張ればやれるんだということで、在校生に対して希望をもたせる結果になりました。

人間科学部としてのカリキュラムでは、わが国で一番最初に人間科学部を創設したといわれる大阪大学の先生方にいろいろお伺いしたりしながら、現状にあったカリキュラムをつくって

いかなければいけないのではないかと考えています。

司会 どうもありがとうございました。それでは東京から、武蔵野女子大学の人間科学部にお願いします。学科は人間関係学科をおもちだそうで、そういう意味では常磐大学と似た構成ですが、中村先生、どうぞよろしく。

中村 武蔵野女子大学の中村孝文です。私は単なる一介の教員でありまして、本当は学長とか、学科主任が来るべきだったと思います。私に分かる限りでお話ししたいと思います。

我々の人間関係学科は文学部の中の一つの学科であります。まだ現在3年生が在籍しております。従来的一般教養課程を変えたりして人間関係学科という学科をつくったわけでありまして、当初その一般教育の中でどういう学科をつくるかという議論をしていくつか意見が出ました。一つは人間科学科という学科あるいは人間科学部をつくろうかという話が出たんですが、いろんな制約で、学部は無理だということで、これは講師の関係などの理由があったようです。それならば人間科学科という学科を、という話になって、文部省に行ったら、これも文学部の中の学科は科学ではだめだという話がありまして、それで文部省とのやりとりの中で人間関係学科になったという経緯がございます。

それともう一つは、一般教育の中で心理学の先生方の中の多数意見だったんですが、心理学科という学科をつくろうという意見がございました。これは事実上心理学科にしてしまうと他の大学から心理学の先生をよばないといけなくなります。できれば一般教育に所属している先生方が多数移れるようにしたいということがありまして、そのような事情から人間関係学科に落ち着いたわけです。

その人間関係学科ですが、教育、社会、心理というところが少し違ひまして、一つは我々のところは仏教系の大学でありますので、宗教関係の先生が何人かおられますが、その先生方において宗教文化系の科目をつくっています。

それから、心理というよりも、心と身体の問題を一体として捉えられる、心身分析系という心理と医学関係のような課目を少し入れました。

それからもう一つ、人間の社会における側面で、人間社会系という三つ目の科目群をつくりました。学生はそこから自由に選択できるようになっていて、入学後自由に選択していくという形にしています。

一応そういうことでスタートして今3年生まで来たわけですが、3年間経ってみて学生の話聞いていますと、いくつか問題があるのかなという感じがしております。それは先程常磐大学の安田先生の方からお話があったと思いますが、広く浅くという形にどうもなりがちで、たとえば心理学を勉強したいと思って入ってきた学生からは不満が非常にでてくる。もっと心理学を一生懸命深く、いろんな科目を勉強していきたいが、ところが一応心理学は形だけはいくつかそろっているけれどもそれ以上のことはできない。結局、その分をあまり関心がない宗教

とか社会学とかを勉強して単位を受けなければいけない。そういうような不満がありますが、そういうことがないように、本来は一年生の段階で人間論基礎という科目が三つあります。

それから、1年の後期にその演習である人間関係基本演習というのが三つあります。その中でできるだけその科目間の有機的な関連をつけ、それから今申し上げた宗教文化系だとか心身分析系、人間社会系の間の有機的な関連をあらかじめつけて、学生の方向づけをしたいということでそういう科目をおいたわけです。実際やってみますと、それを担当する先生方がやはり自分の専門のところでしかお話しをして下さらなくて、人間論の間での有機的な関連がなかなかできない。ですから学生も入ったんだけど、いろんな科目を寄せ集めて、人間論や人間科学がどういうものであるかが理解できないまま、いろいろな科目を教わる。それが全体としてどういう考え方をもっているのかよく分からない。そういう問題がでてきております。先程言いましたように、心理学をもう少し勉強したい、資格の問題もありまして、資格をとって就職したいという学生の要望と、教員の側の、幅広い教養を身につけて人間として豊かになっていただきたいという要望がお互いぶつかり合うということで、矛盾をきたしているという状態が大きな問題としてあると思います。

それ以外にも、一般教養科目をなくしまして、テーマ科目をたくさんつくりました。そのテーマ科目も、たとえば女性の生き方を考えるとか芸術のすすめとか、いろんなものをやるんですが、これも我々としては総合的に学生に勉強してもらえるかなと思ったんですが、それに反して、やはり担当の先生方がどちらかというと自分の専門に近いところで話しをされている。学生側ではテーマとしてそこにどういう統一性があるのかが良く見えないということが問題として出てきている気がします。

あと1年しますと卒業生が出ますので、カリキュラムの改訂ということを考えているんですが、そのときに今ようやく出てきましたのは、文学部から外に出て人間科学部という学部にしようかという話です。このような学部の名称も考えなければいけないということで、学部の名称というのは学部の性格づけになると思いますが、その辺をこれから議論しなければいけないところなんです。まだどういうふうに総合していいかわからない。つまり総合を目指したら、実は個別のところが上がって行って、ゼミも選択するわけですが、心理関係のゼミにたくさん人が集まるけれども、宗教系とか社会のところには人が集まらないという事実があります。今度卒論のときにどうそれを有機的にまとめていくかという、これも今のところ我々もお手あげ状態になってしまっていて、無責任な話なんですけれども、4年生の卒論をどうしていいかわからないという状態なんです。いろいろ恥ずかしい内容なんですけれども、率直なところそういうような状態であります。

司会 どうもありがとうございました。最後になりますけれども、文教大学人間科学部からお二方ご参加いただいておりますけれども、森井先生よろしくお願いいたします。

森井 文教大学の森井でございます。私立大学としては最初の人間科学部というのは大変名誉なことかどうかわかりません。1976年に人間科学部を開設したわけですが、他の大学でもそういう例がありますように、全く白紙の状態で人間科学部を構想したわけではなく、伝統的にありました家政学部児童学科と家政学科の一部を土台にして開設した人間科学部です。

それから21年経ちますけれども、まだその名残がありまして、たとえば当時の構成の制約から自由ではありません。ただここでは21年間の歴史を申し上げる場ではありませんし、会場入口の廊下のところに10年史を少し置かせていただきましたので、そんなものにお目を通していただければと思いますので、あまり詳しい話は省略させていただきます。私どもは1学部1学科で、それ以下の組織としては文部省的には表へ出ないコースとか専修という性格のものがありますが、これは心理学、社会学、教育学で、当初はそれに加えてさらに総合コースというようなものをもっていき出しました。やはり総合コースというのが学生には分かりづらい。なかなかはっきり教育の焦点も定まらないということで、総合コースというのをやめて、人間学という専修をおきました。つまり、心理学、社会学があり、教育学はその後障害児教育と変えるわけですが、人間学と4専修でほぼこの15年程推移してまいりました。

先程もいろいろお話がありましたように、自由に選ばせると、ものすごいアンバランスがおこります。これは大変大きな問題として抱えている問題ですが、人間科学部人間科学科、1学部1学科でやってまいりましたが、来年4月から臨床心理学科を新設することで申請中で、これは通るか通らないかというところであります。

臨時定員増を入れて人間科学科が180名に対して臨床心理学科は120名という定員で今申請中であります。これは開学以来の初めての大きな変化で、これをどう受け止めていくか。そこでカリキュラムの改定ということが当然起こるというわけですが、ただ既存の学科は変更しないということが当たり前ですから、人間科学科はそんなに大きく変えるわけにはまいりません。人間科学科の心理学の専修はおいたまま、新たに臨床心理学科ができることになります。それによって生じる変化というのはちょっと予想がつきません。つかないといいながらちょっとついているのは、多分、一層心理学志向が強まるであろうということです。それには学部全体にとってプラスの点ばかりではなくて、様々な問題があります。

そのときに少しばかりカリキュラムを改定しました。両学科にまたがる共通科目としては、今まで1年生の4単位の科目を5科目必修にしておりました。大変過重なカリキュラムですから、それを改めて、2単位ずつの概論、つまり人間科学部の入門的な各分野の七つの科目のうち四つを選択させて、かなり量的には軽減をはかったわけです。

七つというのは、従来の心理学、社会学、教育学、さらに臨床心理学、それから従来からあります社会福祉、生涯教育、それから文化人類学、などの諸概論です。つまり概論という形をしておりますが、七つ程の概論各2単位のうち4科目は必修とする。従来は五つの4単位を全部必修にするというようかなり乱暴なことをしておりましたが、やっとその呪縛から解放さ

れるということで、教員の方も少し喜んでいるところです。

先程のお昼の話し合いで、来年のこの第4回のフォーラムを文教大学でお引き受けすることになりそうですので、そこでまた話を詳しくご紹介することがあるかと思います。このぐらいでご勘弁願います。

司会 どうもありがとうございました。今日ご参加の人間科学部、人間関係学科関係の状況をいろいろお出しいただきましたけれども、4時まで15分ぐらい休憩といたします。レストラン文泉のほうで、どうぞ、お茶などお飲みいただければと思います。ご協力よろしく願いいたします。

〈休 憩〉

司会 それではお約束のお時間になりましたので再開させていただきたいと思います。最初にちょっとご報告申し上げておきますけれども、たまたまこの期間、連休ということで北海道関係の交通が非常に混んでいます。最後までご滞在できないという方がいらっしゃるかもしれません。もうすでにお帰りになられた方もございますけれども、この中に途中でお帰りになられる方がいらっしゃいますか。

これまで前半でお三方のご報告とそれぞれのご報告以外の大学の状況等もお話しただけなわけがございますけれども、ある程度問題がいくつか浮かび上がってきているようには思われます。これに入ります前にちょっと時間をいただきまして、どういう問題でもけっこうですから率直にご意見を願います。どなたに関してもと言いますか、どういう問題でもよろしいですから、まずこれは言っておきたいとか、知っておきたいという問題がございましたら、率直にお出ししていただいて、その後である問題を取りながら進めさせていただいた方がよろしいと思います。最初にどんなことでも結構ですので、自由にお出し下さい。

濱口 先程の私の話に、早稲田の人間科学部は三つの学科があって、その三つの学科のそれぞれの相互の連関がどういう考え方にもとづいてつくられているのかというご質問がございました。私はひたたく非常に言葉少なくお答えしてしまったので、ご質問を出した先生には、学科のそれぞれのつながりがどういうふうになっているのか一層お分かりにならなかったろうと思いますので、一言二言補足させていただきます。

この三つの学科それぞれのつくり方なんですけれども、一つは人間基礎科学科の特徴を申し上げますと、非常に実習を重視しております。これは1996年度までと1997年度の新しいカリキュラムをともに貫いている考え方です。

特に人間基礎科学科の学生ですと、三つのそれぞれ異なった領域の実習を必修にしていた時

期が何年か続いております。その三つの分野というのは、いわゆる生命科学の実習、それから心理学の実習、社会学の実習です。これは全部で19単位履修を必要としておりました。学生の方から見てもものすごく過重になるんですね。これはご承知のように生命科学の分野ですと、データが出るまでにかなりの時間がかかります。与えられた時間の中だけで終わるわけではないですから、かなりの長時間拘束されることになります。

それから社会系ですと、フィールドに出てそのデータを記録するので、1年間の単年度で終わらないで次の年度にもちこしをするということがあったりして、大変過重です。それを9単位に途中で改正し、新しいカリキュラムをつくりました。つまり今年度からカリキュラムも一層そのように努力しております。

どういうふうにしたかという、3領域は二つの実習を必ずとることになっています。これは学生の方から見ると、2年生、3年生でとるんですけれども、人間基礎科学科の学生の中核に、人間科学部の人間基礎科学科に注目しているんだという学部意識をもたせ、それから自分の専門性に関する自覚を植えつけているという働きをカリキュラムの上で果たしているんです。

そうすると、このことと他の学科とのつながりがどうなっているかといいますと、人間基礎科学科は、どちらかというとも必ずしも原理的ではないんですけれども、そういう基礎的な事柄を既存の学問に多くは依存しています。これは教える方がそうであってもやむを得ないので、それにかける時間を待って、つまり10年あるいは20年という時間を待ったのちに、新しいタイプの学生が出てくることを期待せざるを得ない。話の途中で申し上げましたように、人間科学部出身の助手とそうでない助手との座談会をやってみると、そういう違いが出てくるのです。そういう違いが徐々に出てきているのだと思います。

人間健康科学科、スポーツ科学科とのつながりから見ると、人間健康科学科は今申し上げたような原理的な事柄を学びます。実際の環境におかれたときに、どういう人間の具体的な適応がおこるのか。そういう問題を、人間健康科学科が人間工学とか、あるいは社会と文化、心理、臨床、教育、工学という領域から主として学んでいく、あるいは考究していくという教育をしていくということをうたっております。

それからスポーツ科学科の場合、若干注釈が必要です。このスポーツ科学科は、人間科学科が10年前にできる際に医学部、つまりスポーツ科学部というものをつくることで始めはスタートしたんですけれども、当時のおそらく100周年事業の中で医学部をつくるだけの余力がありませんでした。財政的にも学内的な合意をなかなか得にくくて、1学部、人間科学部に統合させるという形をとりました。

けれども、結果的に実際に現行を考えてみると、あるいは人間の生涯にわたる生き方を考えてみると、文化としてのスポーツがもっているウエイトが大変多いわけです。それでスポーツを通して、そして必ずしもスポーツをするというものではなくて、スポーツを科学する側面が重視されています。このカリキュラムを見ていただくと分かりますように、必ずしもそれぞれ

のスポーツ選手だけから構成されているのではなくて、スポーツそのものを科学の対象にするという側面がありますので、人間科学の全体の構成の中からいうと若干発足時のそういう違いが残っているんですけども、理念の上では必ずしも不整合なものであるとは思っておりません。

そういうわけで、今申し上げましたのは、一つは実習を重視していること、もう一つはそういう学科の特徴を、主として人間基礎科学の方から見て、今申しあげたようなことを言えるのだろうと私は思います。

司会 どうもありがとうございました。最初をお願いしましたように、率直なご意見をうかがいたいと思います。確かに柱をたてないほうがよろしいかなと思ったのですが、たて方がちょっと整理されていないかもしれませんが、だいたい六つ〜七つぐらい問題が提起されていたと思います。今日の午後の課題からいたしますと、当然「人間科学と大学教育」になるわけですが、最後にご報告いただいた中野先生が「人間科学の教育から人間科学研究へ」と、そういう問題を提起されて、(発表レジュメのところに書き添えておられませんので)若干最後に一般論として補足していただいて、ここからまた午前中の残された問題に返ることができれば、つながってゆくのではないかと考えていますので、若干その時間をとらせていただきたいと思います。

午後の「人間科学と大学教育」のところでお三方、それからその他出していただきました大学の方々のいろいろ出された問題というのは五つぐらいあるのではないかと思います。一つは広い意味での人間科学を冠する学部学科に在籍する学生諸君と教員の問題です。学生が何を求めているか、又午前中のところだと、期待しながら幻滅するというような問題も含めることができます。

1回目・2回目のフォーラムでは早稲田の先生の方から人間科学のイメージということで、人間科学科というものがどういうふうに、たとえば高校生などに受け止められているかというご報告もあったのですけれども、その延長線上で実際に諸々の広い意味での人間に関する学部学科に在籍している学生の人たちが、人間科学部をどう受け止めているか。これは先程濱口先生のところで四つの類型ということや、具体的なレポートなどを通じて整理されたところがあります。あるいはカリキュラム改正のときに学生の意見を入れて科目を設定したというご報告もありますし、中野先生の方からも人間学概論という必修科目についての学生の受け止め方を受け入れながら講義内容を変えていったというようなこともございまして、大学教育というからには、人間科学を大学がどう考え、これを学生諸君はどういうふうに受け止めて何を期待しているのか、逆に何をうらぎられているかというような問題が一つの大きな問題としてあるのではないかと思います。

それとは裏はらに、それも何人かの先生からお出ししていただいていますけれども、特別な

科学ではなくて総合的な性格をもつ人間科学だという場合に、当然そういう講義が要求されるけれども、担当する教員がそれに答えられないあるいはできればやりたくない、あるいはやる場合には専門をやるという傾向が共通に存在するといってもいいと思われます。その辺の問題は午前中に議論されましたこととつながっていくのではないかと思います、その点をセッ
トにしてもう少し深めていただければというのが第1の問題です。

二つ目の問題として、一つ目とつながりますけれども、これは安田先生のお言葉ですが、人間科学の専門とは何か、学部段階も大学院程度も含めて、人間科学の専門とは何かという問題です。これとは逆に、人間科学という科目がどうしても浅く広くになるということが何人の方々が指摘になられていました。浅く広くに対して学生諸君は専門を求める。たとえば心理学なら心理学を深くということを求める。そうしますと人間科学からはなれていった別の科学ということになりかねないわけですが、そういうあたりをまぬがれながら、どういうふうに人間科学の専門を捉えて深めていくかという課題が一つ大きな問題として、もし広い意味での人間に関する学科を維持していくとすれば、存在するのではないかと思います。

それと関係して今日は安田先生と中野先生が出されておりますけれども、基礎的な力が必要であるという問題も提示されたと思います。基礎を身につけていないで総合はあり得ないという意味のご提示がありました。これも要するに人間科学の教育における総合と別の専門の基礎というものの関係を具体的にどう考えるかという問題がだろうと思いました。

三つ目に、非常にある意味で現実的である深刻な問題も含まれますけれども、学生諸君の期待が大きいというその期待の中に、社会的な要請というふうに言われる、端的に言えば資格志向ということも含めたそういう意味での現実的な社会的要請がますます強まっているということです。たとえば心理学とか臨床心理士とかそういうことを求めればますます広がっていくということになります。先程の鮑田先生のお話ですと、社会的要請におされるということによってよろしいかという形で出されておりますが、これは無視できないことであります。そのことと人間科学の学科・専門教育とをどう両立していったらいいのかという問題が提示されていると思います。

四つ目に、多くの大学で一定年数続きますとカリキュラム改革という問題にぶつかるということが出されておりました。その際に今の資格などを含めてどう対応するかということでございますが、専門教育については、必修科目だとか、指定科目を緩めるという方向が一つ共通にでていたと思うんです。それから学科間あるいはコース間の壁を低くするという形で議論が出てきたと思います。こういう傾向は大学基準の大綱化などとの関連で今の日本の大学全体がそういう傾向にあり、一般的な傾向であるということはあるかと思いますけれども、広い意味での人間に関する学部学科に特に求められてきていることであるのか。このあたりをもう少し詰めていただく必要があるのではないかと思います。カリキュラムの自由化を進めていくということが専門性とか基礎というものにどのようにつながっていくかという問題が、皆さんが共

通に考えている問題として出されていたのではないかと思います。

五つ目に、第2回目のフォーラムのときに大学院教育の関係で後継者養成ということが問題になっていたと思いますけれども、今日のご報告でも大学院に人間科学研究科を修了した方は1人もまだいらっしゃらないわけで、そういう状況もまた広く見られるのではないかと思います。後継者養成、それは単に養成しただけではなくて養成した人をどう迎えるかというところまでふみこんだ問題が出されていたのではないかと思います。

そういう問題はうまく整理できていないかもしれません。落ちている問題、重要な問題をご指摘いただきたいと思います。もし他にご異論がなければ、そういう順番で均等に時間をかけるというわけにはいかないかもしれませんが、ひとわりご検討いただいて、できれば最後に若干の時間をとっていただいて教育の問題からふたたび人間科学の研究のあり方というところまでいきたいと思います。

他にこういうものもあるのではないかとということがございましたらご指摘いただきたいと思います。特にご意見がなければ今出させていただいたような内容をできるだけ網羅した形で意見を頂戴したいと思っております。それではそういう形で進めさせていただきますけれども、最初に広い意味での人間に関する学部学科に所属する学生たち、それから教員たちの意識の問題、あり方の問題、学生諸君が何を期待していて、それにどう答えるべきか、そういうあたりで、それぞれの大学の実際の状況などを含めながら、もう少しご討論いただきたいと思います。

濱口 大学院は私が1人で担当しているのではないのですけれども、人間科学特論というのが大学院の共通専門になると思います。とにかく早稲田大学は生命科学と健康科学という2学科から成り立っておりますが、どちらの学科の学生でも選択してとる科目として人間科学特論というのを私が担当しております。私だけでなく全部で6～7人で担当しております、初めの方を私が担当しております。それで今年の前期の私の担当したところで出てきたレポートに全部で50くらいの人間科学に関する文献のリストを渡して、その中から選ばせながら、自分の人間科学と自分がやろうとしているそれぞれの専門との関係で論文を要求しております。

そのリストの中で、非常に不思議な、非常に特異な現象があります。それは、今日ここに私どもの人間科学研究科の委員長の春木先生がいらっしゃっておりますけれども、春木先生のお書きになった「人間科学への態度」という論文なんです。これは非常にという語弊があるんですが、とにかくよく学生が引用します。

その引用の一つを紹介しますと、ヒューマン・サイエンス、これは人間総合研究センターの紀要ですが、これに春木先生がお書きになった論文で「人間科学への態度」というのがありまして、学生がそれをしばしば引用しております。どう引用しているかというと、学生がこう言っています。「人間科学について既存の概念があるわけではない。これから形成していかなけ

ればならない概念である」という春木先生の文章を引用して、そういう言葉が冒頭に書かれ、この一文からは強い意志と不安めいたものが感じられ、共感が得られる。人間科学の大学院に進学した学生がそういう論文を読んで、つまり強い意志と不安めいたもの、つまり一方では強い不安と一方では意志をもつわけです。

どういう点で不安なのかというと、人間科学はいう程に形をなしていないのではないかという不安です。けれども他方で見ると、これから形成していかなければならないということで、それでは自分たちがやらなくては、という強い意志を感じるという書き出しなんです。総じて見られるのは、人間科学とは何かということにかんするためらいなんです。これは学部学生でも大学院の学生にも共通にあることなんですけれども、通り抜けながら自分それぞれが人間科学についてどういうふうに考えていくのかということで、私が一番初めに人間科学について話をしたときに申し上げたように、だいたいおおよそ四つぐらいの人間科学に対する態度に収斂しているのではないかというふうに言っております。

これが第一点です。今度は教育側の問題として見ると、どうしても当初の人間科学部は改組してつくった学部じゃなくて、全く新しくつくった学部なんです。その学部の理念に共鳴して教員が集まってきたというわけにはなかなかいかないんです。それで先生方の中にも当初は人間科学部の中に人間科学に関する研究会を一方的に開いていたことがあります。そのうちにいつか沙汰止みになってしまいました。これはだいたいそういうものなんです。そうすると沙汰止みになったということは先生方が自分たちの専門に戻って行って、専門のそれぞれの学会で報告をして論文を書いてというふうになっていったということです。そういうこともあるので、これをご紹介しました人間科学宣言は、実はもう一度そういう教える側の原点に戻って行って、我々が一体何をしようとしているのかを学生にどのように伝えていくか。これを確認しようという意図があって、人間科学部宣言をつくりました。先程も報告で申し上げましたように、今後そのことをどう具体化するのかという課題はそれぞれ全部で五つありますけれども、これが一応日常的な点検を宣言しておりますので、それにもとづいて1. 2. 3. 4をどのように具体化するのかということこれから探究したいと思っております。

ところで入ってくる学生はだいたい3分の1は自分の専門を決めて入ってきております。3分の1が大学、学部に入ってきてから、これから自分は何かをめざしているんだけれども、まだ十分に自分がやろうということが分からない。あとの3分の1はどこでもいいから入ろうという学生から構成されております。

私は、人間科学部がそれぞれそういう様々な学生を抱えているわけですから、その学生にどのように対応すればいいのかということはカリキュラムをつくることだけではないと思っています。カリキュラムそのものをどのように運営していくのかという点で、その点はやはり学部とか学科とかという組織のもっている有効性だろうと思うのですが、その有効性をどういうふうにするにすればよりうまく動かすことができるのかを学部として考えていきたいというふうに思っ

ています。

司会 いかがでしょうか。教員の方の問題もいろいろ出されましたし、カリキュラムの問題なども提起されましたが。

安田 一番私が考えるのは、人間科学の将来像はどういう人を目安にしているかということです。人間は職業をもっていけないと生きていけませんから、人生をいかに深く見つめてもそこから出てくるものは文学とか小説とか社会科学の勉強とかいろいろなことになるんでしょうけれども、どういうものを目的にしているかが大切です。

こういう各論的なことでは申し訳ないんですけれども、たとえば私どもの知っている範囲だと、自分の専門以外何かをもっている有名な人間といいますと、森鷗外がいます。もともとは医者ですが、明治最初の文学全集あたりたくさん出ています。けれども彼が医者で何をしたかは全然知らないのです。ですけれども、これも一つの生き方ですね。今で言えば、なだいなだは私の同級生ですけれども、あれも学生のとときに何を勉強していたのかよく覚えておりません。彼は医者の免許だけとって、フランス語ばかりやって小説家になったのです。医者ばかりで申し訳ないんですけれども、斉藤茂吉なんていう人がいたり、かたや文学だとか心理学ばかりの方で、要するに二つ以上の専門をもっている方にイメージをもつとすれば、僕の知っているところはそういうところですよ。もうちょっとはずしますと、どういう人間がそういう人間科学的な結果であったかと言いますとよくぼくら文部省で JICA に引っぱられて中国などに行かされて、見えています、どの小さい都市に行ってもキリスト教の教会があります。もちろん、今は宗教はだめですけれども、そういうふうに捉えると、たとえばウルムチとかイリンとか、あの様な砂漠の先の所でかつてはリュックサックをかついで行ったんだと思うんです。その連中はヨーロッパではおそらく教会に属していて、まず医学を修めていただろうと思います。なぜなら彼らは現地へ行って治療などにあたっていましたから。次にももちろんキリスト教を修めている。神学もしていただろうと思います。それからいろんな教育の方法も知っていたにちがいありません。要するに、浅く広く、非常に多くのマルチポテンツ、マルチプロダクツの人だったのではないかと思います。彼らはやはり民衆の尊敬を得てその場で骨を埋めている。こういう人がやはり人間科学の最終像なのかなと思ったことがあるんです。これはある意味では悲劇的ですが、たとえば今申し上げたことは、人間科学を出たらどういう人になるかというあるサジェスチョンを、どなたか経験の深い方におっしゃっていただければ学生の一つの励みにもなるんじゃないかと思って、余計なことであまり役には立ちませんが、申し上げた次第です。

司会 基本的なことをお出しいただきました。

森井 経験があるからということではなくて、非常に一般論的なことですが、学部レベルでは、特に文科系の学部では特定の職業と結びつく教育というのはむしろ少数ではないかと思います。たとえば私どもの大学では、教育学部は昭和50年代には100%が小学校の教員になっておりましたけれども、今はこの教育学部の学生は教員になりたいんですが、3割しかありません。ですから法学部とか経済学部とかいう学部ですと、特定の職種と結びつく教育ができるかも知れませんが、文科系では文学部はもちろん、昔は文学部ですと教員ということもあったのかも知れませんが、教育学部ですら今教員になるのは困難な時代です。大学というのは最終的には、一応大学院に進学する者を除きますと、多分職業生活と直結しているという教育のグレードではありますけれども、特定の職業に結びついた教育にはなかなかかなりにくいものがあるということは一つどうしても避けられないことのような気がします。

その中でも、私ども人間科学部では、他の経済学部等に比べると学校には言えない言い方ですが、公益サービス業とでもいいますか、あまり企業ではない領域を志向する学生が初めから多いことも事実です。しかし、それはたとえば臨床心理士であったり、ソーシャルワーカーです。学部レベルでは一番、専門職と言えるかどうか分かりませんが、福祉はかなり幅の広い領域で、私どもの学部の場合、だいたい2割が福祉従事者になります。社会福祉士の受験資格が得られますし、200名中、50名が社会福祉士の受験資格を取得するようなことを考えますと、かなり福祉志向が強い。

ですから、今の安田先生にあまり適確にお答えすることはもちろんできませんけれども、どういう人間をつくるのかというと、特定の職種、たとえば医学部が医師を養成するというようなわけにはいかないわけですが、どんなところに人間科学の特徴があるのだろうかといえ、甚だ漠然としているのですが、具体的な例をお話しします。私は社会福祉をやっているのですが、現場に実習に出します。私も学部から学生を福祉施設に一緒に連れていきます。私どもは実習先を訪問するわけです。そうすると「おたくの学生さんは福祉系の学部ですけど、どうもちょっとひと味違う」というふうに言われるんです。それはあちこちで言われるんです。そしてそれは決して低い評価ではないということが多くて、それはどういうことかという、ちょっとキザな言い方ですが、人間の内面に対する、暖かなまなざしといいますか、洞察的な見方というか、相手側に立つということなのです。福祉系の学生は、本来はそれができなければいけないはずですが、社会問題意識が強い。社会の問題として捉えるという点では非常に優れているが、個々の問題ではどちらかに片寄ってはいけないわけです。人間科学部の学生の気風として、非常に人間的な学び方ができ、そして接し方も思いやりがあるというか優しいというか、そういうところが非常に目立つということを一カ所ならず何ヶ所からも言われる。私どもは悪い気はしないわけで、これはなかなか人間科学部の特徴であるのかなとひそかに思ったりします。

また教育学部を卒業して教員になる学生よりも、人間科学部を卒業して教員になった学生の

方が子どもに対する見方や接し方ははるかにレベルが高いと思います。私はどうも教員養成というのは気に入らないというか、教員養成でやれば教科には大変強い教員ができるかもしれませんが、今の時代ではそれだけでは不十分だと思います。私には、いじめの問題がどうこうだから、カウンセラーを配属すればいいとか、それも必要かもしれませんが、そんなものではなく、ホームルームティーチャーのレベルでは、やはりもうちょっと人間科学的である必要があるのではないかと考えています。非常に雑駁なというか、経験的なお話で申し訳ないのですが、そういうことを感じることは多くあります。

それから、人間科学部人間科学科の学生の中でかなり人間科学部にアイデンティティをもっている学生が言うことなんですが、うちの学部の良いところは、特定の領域に片寄らずにいろんなことができると思います。心理学とか社会学とか教育とか福祉とか、片寄らずにまんべんなくというか、学生の興味関心にもとづいて履習でき、それぞれの学問の領域ごとに学問間に厚い壁がないことが人間科学部らしさだというようなことを申します。そうすると少し私はいい気になったりするという面はございます。個々の教員はかなりそれぞれの自分の領域に膠着しているところがあって、むしろ学生の方が良くできているというか、学生の方は人間科学部を卒業するわけで、教員の方は、先程も言いました様に、人間科学部卒ではないという限界を引きずっている。こういったところでしょうか。でもそんなことは言っていられなくて、教員自身が自己変革をしていくということが非常に重要なことで、そう簡単にはいかないですけども、いつももち続けていなくてはいけない課題だと思っています。

司会 ありがとうございます。ひと味違う、まさにいいえて妙というお話をいただきました。ひと味違うというのは何によってもたらされるのかということになると思うんですけども、この問題はカリキュラムを自由化することとも関係しますが、この問題はあとでまたご議論いただきたいと思います。先程安田先生がおっしゃられた将来像というところで、卒業した時点でどうなるかという、いわゆる進路問題がございます。これは、矮小化かもしれませんが、非常に基本的な原理的な問題です。先程愛知みずほ大学の飽田先生、それから武蔵野女子大学の中村先生が出されておりましたけれども、現実にある特定の職種の資格を求めているということが圧倒的に増えてきているということがおそらく多くのところで共通に見られることだと思います。そうしますと、人間科学科ではなくて、もっとそれに直接対応できる学科をつくればいいのではないかとすることがでてくるでしょうし、「人間」ははずさなくとも、ただ今福祉のお話がありましたけれども、ひと味違うという点では、社会福祉学科と違う人間福祉学科も続々でてきておりますので、社会福祉学科と人間福祉学科とどこがちがうかとかが問題になると思います。人間に関する学部・学科でみますと、たしか学科レベルでは60ぐらいあると思いますが、そのうち4分の1の15ぐらいが人間科学科で、若干それを上まわる規模が人間関係学科です。残りの半分の30ぐらいの大学が人間科学科・人間関係学科以外の人間行

動、人間発達、人間福祉、人間環境云々、そういう広い意味での人間に関する学科ということになります。来年度文教大学で第4回のフォーラムをお世話いただくそうですけれども、この集まりがどこら辺までを対象としていくかという問題にもなってくると思うのです。

人間を冠する学部・学科ということになったとしても、総合人間学科もあれば人間福祉もあるというような、分化してきているというのが現状ではないかと思います。あとは資格と言いますか、言いかえれば学生のある意味での期待、社会のある意味での期待にどう答えるのか。あるいは、先程の飽田先生の言葉では、押し流されていいのかという問題も含めて、そのあたりをもう少しさらにお出しいただければと思います。

春木 早稲田大学の春木でございます。ただ今の問題提起とちょっと関係するかどうかわかりませんが、割合この心理学などそうなるんでしょうけれども、現実的には資格の問題というのがあります。ただ昔のことを言えば、私どもの時代では文学部の心理学なんて言ったら、高校の先生がお前は風呂屋の亭主になるしかないと言われたのを今でも覚えているくらいです。必ずしも大学での勉強というものが具体的な職業に結びつけて考えなければいけないのだろうけれども、こういう問題はあると思うんです。安田先生は医学部出身ですから、当然資格の問題、職業と結びつけてお考えになったんですけれども、いわゆる文系と言いますか、経済とか、法学部も特に法律家になるわけではありません。そういう意味で文系と職業との関係は、非常にある意味では複雑になるかもしれません。

それで私は人間科学部ですけれども、今お話ありましたように、最近やたらに人間論をくっつけてやっているのが多くなっているのご指摘については、少なくとも、たとえば私は心理学ですけれども、心理学は文学部でもできるわけです。しかし人間科学部の中で、たとえば心理学にしろ社会学にしろ、我々早稲田の場合には生物学を習うわけですが、人間科学をやるという特徴を学生につけてあげないといけないと思うわけです。

何らかの意味でやはり人間科学部を出たんだという特色をつけてあげなければいけない。たとえば今文教大学の例をお話いただきましたけれども、ある面で文教大学ではそれを実現していらっしゃるということになるかなと思います。私の考えるところでは、人間科学部と名付けてそこを卒業していく学生に対して何か付加価値をつけないといけないということです。

人間科学部は文学部と学問の内容は非常に関係が深いわけでしょうが、たとえば人間科学部にはフランス文学などというのはないわけです。そういう意味で、社会学にしろ、心理学にしろ、福祉にしろ、人間の現実の問題に関わるという面が文学部よりは少し強いのではないかと。これが、人間科学部とたとえば文学部の違いにかんする私のイメージなんです。

そういう意味で、心理学にしろ福祉にしろ、そこへ行けば資格がとれる。これは将来多分出てくる現象ではないかなというふうに思うんです。では単なる職業教育の場にすればいいということであつては、やはり人間科学の特色は出ないと思います。文学部の心理学科の大学院を

出ても臨床心理士になれるわけですから。結局人間科学部の学生の形は何かと言ったら、やはり人間についての考え方だと思うんです。人間科学部の学生は、たとえば文学部の心理学の学生よりは、人間という視点で心理学というものを考え、人間というものを中心に考えるわけです。そうしますと、人間というのは身体でもあり、社会でもあるわけですから、そういう関連学問との関係を考えつつ、あるいはそれぞれを学びつつ、人間を考えるということが人間科学部の学生の特徴と言えるのではないかと。

もう一つ私が強調したいのは、人間科学というのはいわゆる自然科学とどう違うか。科学についての新しい考え方というものを考えていかなければならないのではないかとということも今非常に思うんです。

たとえば私はあまり物理、数理系のことは知らないんですけれども、科学というと基本的には理論と考え方をモデルにした実験というイメージはあると思うんですけれども、複雑系の科学というようなことで科学自体が変貌しつつあります。そういう科学の方法論自体を学んでみるということが大切だと思うんです。それから人間科学ということになりますと、間主体とか間主観とかということばがあるようでございますが、研究者も含めて人間科学に関わる人が方法論を考えなければなりません。たとえばそういう科学的なものの考え方、そういうものを考えていくと、それは普通の理学部で科学を考えるのとちょっと違うことです。その辺の考え方、パラダイムについて学べるということで何か特色を出せないか、と思っているわけでございます。

具体的にどうするか。たとえば人間についていろんな学問を勉強するというと、先程来、浅く広くという、安田先生の図式がございましたけれども、ああいうふう人間を多方面から考えるときに、それぞれの専門の深さと広さをどう調和させるかが大切です。たとえば中野先生の人間学概論のテキストを見せていただいたんですけれども、ずいぶん大変です。全学問を教えなければいけないわけですから。我々一人ひとりが、やはり人間科学に所属する教員自体が、学生より先にこういうようなテキストを学ばなければならないと思うんです。

中野先生も悲鳴をあげていらっしゃるようで、やはりこれはある意味では非常に大変ですけれども、一人の先生がこういう講義をされるというところにやはり意味があるように思うんです。それぞれの専門の方が、それぞれある時間を分担してやるというのは、我々早稲田の人間科学部でも、濱口先生がご紹介していますけれども、やっていますけれども、それはそれで一つの方法かもしれませんけれども、できれば中野先生のような方が人間科学あるいは人間学ということでやるという講義が必要なのではないか。それは一人の先生に任すというよりは、やはり我々人間科学に属している教員一人ひとりがそういう努力をするということではないかなと思うわけであります。

人間について知るのにどういうふう勉強させるか、あるいは我々自身が勉強をするのか。深くはとてでもできません。しかし、私なんかも早稲田の基礎科学科に身を置いています、全

部の先生が雑談しているとけっこう面白いんです。ものの考え方の違いがよく分かるのです。それから、たとえば電子顕微鏡の先生が私どもの方にいらっしゃって、小腸の細胞をのぞいていらっしゃるわけですが、そういう細胞の写真を見せられて、本当にすごいものだと思います。それぞれの細胞が独自に判断したりしているとか、そんな話を聞いているとびっくりすると思うか、そんなこともありますので、本当のところは良くわけが分からないのですが、面白いじゃないかと思うんです。

司会 先程のお話の一味違うということが実際にどういうことであるか説明していただいたわけですね。そうなりますと、カリキュラムをどういうふう構成するかという問題になります。他の学部学科はよく分かりませんが、人間科学に関する学部学科の場合に、必然的に何年か経つとカリキュラム改革をせざるを得なくなります。私どもも20年たちますけれども、カリキュラム委員会とか学部再編委員会をつくらないで論議した年が何年あったかなというぐらい、そういうことに追い込まれるわけです。今、春木先生のご指摘のように、人間について知ってもらおうとか、あるいは教員同士それをつくっていくというシステムを学科のカリキュラムとしてどういうふうにつくりあげていくかという問題と、先程の人間学概論の内容のご紹介がありましたけれども、一つひとつの科目の内容をどうするかという点に触れて、少しご討議いただければと思います。

鮑田 その前の問題に戻らなければならないんですけれども、うちの学校は大変こじんまりした学校で、定員が160名、人間福祉学科はだいたい50人～60人です。ここに教員がそれぞれ所属しているのですが、私がこの大学にくる以前、研究所におりまして、現職教員にカウンセラーとして、教育相談やカウンセリング・マインドというものの再教育を臨床のかたわらやっていました。それで森井先生のお話に共感してうかがっていたのですが、私が大学の人間になって思うのは、教員と学生の意識のちがいとして、人間科学部の学生は教員の人柄をたいへんよくみているということです。ですから、知識の伝達だけを専門としている教員と、自分たちは何を求めているのか、自分たちの話を人間的に常によくきいて、つねに羅針盤をはっている教員をたいへんよく見抜いていると思うのです。人間科学を教える教員というのは知識の伝達だけではすまないんです。普段自分がどういう姿勢で学生に接しているかということが理屈を抜きにした教育になっているのです。そのことをもっと私たちが自覚して大学で学生に接しなければいけないのではないかと思います。それで大変よくやっている学生が「……先生はもうだめだよ」なんて言うのが、大変よく私の耳に入ってきます。そのことを整理してみますと、学生というのはやはり人間科学を学ぼうとして来ているので、人間を見抜くという視線があるな、ということにすごく思いました。また、そういうライセンス志向ということに関して私はこう考えています。自分のゼミに来る学生は専門教育を身につけていなければだめだよと

いう教員がいますが、私は必ずしも資格ということにこだわっておりません。自分が人間であるかぎり、男性であろうが女性であろうが、これからもこうして子どもを育てて、必要なことは人間を相手に生活するということだから、その基礎を学校で学ぶということが専門教育を受けるということにつながるのではないかと思います。だから、資格をとらなくても、人間について勉強したい人は、私のところにおいでというのです。先程の春木先生のお話からいま思ったのは、人間を相手にしているという、そこが他の科学とは絶対的に違うところなんだということです。ちょっとお話がカリキュラムから戻ってしまいました。

司会 ありがとうございます。非常に大事な基本的な問題をご指摘いただいたと思います。従来教育といいますと、カリキュラムに収斂していく傾向がありました。もちろんそれも大事なんですけれども、それを含めて4年間なら4年間の総合的なまさに取り組みが重要だということを改めてご指摘いただきました。特に人間科学に関する学部学科であればなおそれは基本であるという大事なご指摘をしていただきました。そのあたりを含めて、もう少しご意見を頂戴いたしたいと思います。

中野 結局その問題は学生と教員のあり方の問題と重なると思うんですが、学生につきましては、先程も森井先生が言われていましたように、人間科学科の我々にとって本当に土台にもなると言える手法ではないかと思います。またそういった点をどう受け止めて授業展開をするかということにつきまして春木先生が言われましたことは、非常に基本的な問題提起だろうと思うんです。

ですから、その中で一つは教育を通じまして、学部設立趣意書でも申しましたんですけれども、人間的な感性を養成する。これはある意味では授業科目の総体の一つのシンフォニーみたいなものを通じて、そういう人間的な感性、センシビリティをどう養成するか。そのためにはまた同時に、学生の実習とかあるいは社会的な実践、こういったものとどう結びついていくのかということも考えなくてはならない。環境破壊の話をしなくても、これは学生の日常生活とどうつながり、またはそういう彼らの生活構造あるいは実際に環境を守っていくような運動とどうつながっていくのか。この点は、結局我々がどこかで断念して、学生の自主性だということとで逃げているけれども、ボランティアの問題が今大学の学問自身の問題になってきている。こういった点をどのように考えるか。特に人間科学における実践とか社会的な行動のあたりをもっと真剣に考えなければならないし、これからのカリキュラム改革はもっとそれを考えなければいけない。そのあたりで、これは私の夢でありますけれども、たとえば学部学科が一つの農場みたいなものを持つところから、たとえば森林を愛護する、あるいは自分たちで実際に農作物をつくってみる。あるいは家畜をちょっとでも飼ってみるということを含めて、今の学生に対して何を与えられるかという、実的なフィールドの問題などがあるかと思います。

実は私ども人間科学科が最初に構想として出てきましたときには、その感性の養成という点では、たとえば北海道の私立大学においてはまだ芸術学部がないわけです。札幌にもございません。教育大学の特設音楽や美術があるだけです。芸術学部を同時につくって人文学部と並列させたいというのがもともと夢でありまして、当初はさしあたり短大で音楽科と美術科というのを設置したいと考えたわけです。人間科学科だけでできない範囲のことを、他の学部とのどういう連帯でやるのかということのことも一つの夢でありました。

もう一つ、やはりカリキュラムとの関係で申しますと、専門科目として人間科学科は人間科学をやっている。しかし、同時に一般教育が全学共通教育になっております。そして全学共通教育こそが人間の科学の一つの大いなる教育実践の場のはずなんです。ところが一般教育の問題がまだ位置づいていない。私も今一般教育に対する改革の提案を含めてこの問題について論文をまとめているところでありますけれども、実は一般教育の問題を無視して、人間科学科の専門科目としての充実はありません。その辺の関係をどう先生方はお考えになるか。これはまた本学の人間科学を考える場合にも非常に重要な問題ではないか、と思います。

あとで教員の問題にも関わるわけでございますけれども、先程春木先生に励ましていただきまして、大変ありがたく思っております。人文学部つくるときには一生懸命研究会をやりまして、できたあとはしばらくシンポジウムなどをやっていたんですけれども、そのあとではせいぜいコース別の会議で、その内容もどういうカリキュラムにしたらいいかとか、ゼミの担当はどうするかなどで、それ以上の討論にはなかなかない。その中で人間学概論AとそれにBも入りますけれど、永く続けておりますと、あの人はどう考えているんだろうなという孤独感みたいなものをもつわけです。何しろあらゆる問題をすぐ講義の中に取り上げていかなくてはならない。あと1年半で定年になるから、早く定年になって楽をしたいというのが、今私の切実な夢であります。

それと同時に私の後、誰がこの人間学概論を継ぐのだろうかということもちょっと不安です。そういう意味では、そのあたりについて、もっと率直にうちの学科の先生たちに問題提起をしていかなくてはならないし、言うことは言わなくちゃなんと思っております。そのためには同時に教員がどの様に自己脱皮するかです。自分の専門だと楽なんです。それをやはり内側から乗り越えなくてはならない。このあたりをやはりお互いに厳しく要請し合っていかなければならないでしょう。

そのためには同時に教師自身が何を社会的にも実践するか、という大きな点があると思います。学生にボランティアを言いながら自分は何もしないような教師は、おそらく本当の意味では信用されないということになりましょう。そんなことを含めまして、教師と学生との人間的あり方が問われる。そのあり方が人間科学の発展とつながると私は考えております。

司会 まとめと言いますか、問題点と今後の課題まで含めて話していただいて、本当にありが

とうございました。これからというところで非常に残念なのですが、私の司会進行の問題でございすけれども、最初に申し上げましたように、遠方から来られた方でお帰りにならない方もいらっしゃる。予定の時間を少し過ぎましたけれども、もう少し続けたいのですが、そういうわけにもまいりません。ここで終わらせていただきたいと思います。今日のシンポジウムでご報告いただきました濱口先生、安田先生、中野先生、ありがとうございます。遠路北海道以外からご参加いただきました先生方には特に厚くお礼申し上げます。ご参会のみなさま方には本当に長時間にわたりご協力をいただきまして、ありがとうございます。このフォーラムは、当初、第1回のときはこれからも続けるという話にはなっていなかったようすけれども、先程のお話ですと、4回目も来年開催されるということですので、大いに期待したいと思います。今日出されました問題を含めまして、再び教育から研究へという大事な問題、あるいは毎回出ていて必ずしも継続されていかない後継者養成の問題も含めた大学院教育の問題など、いろいろと課題は残ってはおります。来年また開かれるということでございすので、そこで継続して討議していただきたいと思います。これをもちまして今日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

奥谷 2日間にわたる討論に出席いただきましてまことにありがとうございます。以上をもちまして「第3回フォーラム 人間科学を考える」を終了いたしたいと思います。残された課題は来年文教大学で行われる「第4回人間科学を考える」にすべてバトンタッチさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。